

現在日本の社会的言説の事例に基づく調査・分析・批評—「橋下徹」という現象を素材とする物語生成のポストナラトロジー研究—

Survey, Analysis, and Critique of the Social Discourse in Contemporary Japan Based on an Example: Post-Narratological Study Using the Phenomenon of “Hashimoto Toru”

小方 孝

Takashi Ogata

†岩手県立大学

Iwate Prefectural University

t-ogata@iwate-pu.ac.jp

概要

本研究の背景を成すポストナラトロジーの構想は、その一目標として物語生成システムを使った物語乃至小説の制作を置く。この物語乃至小説は、共同幻想・対幻想・個人幻想にわたる広範な事象や人物を扱うが、本研究では、現在日本の言論空間において一定の影響力を持つと思われる橋下徹という実在人物の、ウクライナにおける戦争をテーマとする Twitter 記事を分析し、その内容の特徴を考察する。その大きな目的は、上記物語乃至小説における登場人物の一タイプとしての造形である。

キーワード：物語生成システム (narrative generation system)、ポストナラトロジー (post-narratology)、橋下徹 (HASHIMOTO Toru)

1. はじめに—背景と目的—

筆者はポストナラトロジーと呼ぶ研究領域を提唱し、実践して来た。ナラトロジーとは、20世紀半ばに唱えられた学問分野であり、物語や物語群の構造や機能を形式的に分析することを最大の目的とする。アリストテレスの『詩学』(1997)や、ロシア革命直後に起こりその後ソヴィエト政権から弾圧されたロシアフォルマリズム(オクチュリエ, 1996)をその先蹤としている。21世紀初頭から起こったポストクラシカルナラトロジー(Sommer, 2012; Ogata, 2022c)は、上述のナラトロジーを古典的なものとして特徴付けた上でのその文脈論的拡大として解釈されており、最近では政治・経済等社会的文脈における物語の機能や構造を探究する研究も増えている。筆者が言うポストナラトロジーは、古典的ナラトロジーが持つ形式的志向を人工知能や認知科学を導入してさらに強化すると共に、例えば各地域における独自の文化における物語を強調する(小方, 2019a, 2020, 2022d, 2022e)は、歌舞伎や日本文学への新しいアプローチを示している)等、ポストクラシカルナラトロジーが持つ文脈論的志向を積極的に取り入れる。ナ

ラトロジーとポストクラシカルナラトロジーを一つの連続的学問運動として捉えれば、その後のナラトロジーという意味で、筆者は以上をポストナラトロジーと呼んでいる。また、物語生成研究の役割を強調する場合、物語生成のポストナラトロジーと呼んでいる。より内容論的な言い方をすれば、20世紀末期の年月において、ナラトロジーは所謂ポストモダン思想と融合して価値的機軸を失い、現象としては何でも許容されるという段階に至り、その実践は例えばロシアにおけるデタラメ物語、disinformation narrativesの壮大な社会的配信・流通実験という、喜劇的=悲劇的な結末を招き、現在に至っている。ポストナラトロジーは、このような状況において、旧来のポストクラシカルナラトロジーを含むナラトロジーの、その後であることを志向している。なお、上述のロシア的状况は、単に「物語批判」と言って済ませられるような事態ではない。ロシアのような謂わばナラトロジーの一つの発祥国・先進国で(今はどうなのか知らないが)、ソ連以来の嘘や情報隠蔽や犯罪でっち上げ等の「伝統」と結び付いて、このようなことが起きていることに対する、ナラトロジーとしての根本的な対抗が求められている。それもポストナラトロジーの実践的目標に関連する。

ポストナラトロジーの二つの主要な関連領域は、ナラトロジー等の物語理論、理論的物語研究と、人工知能・認知科学をベースとする物語研究特に物語生成システム研究である。何れの学的領域においても、それぞれの現在の達成を跡付け今後の課題を明確化しようとする試みが行われている。前者すなわち物語理論に関しては、Dawson and Mäkelä (2022)がナラトロジーや物語理論の現状と最新成果を示す39編の論文を集成している。最初のパートである“Narrative and its Others”に予め示されているように、今や物語理論の首尾範囲は狭義の物語作品を含みつつそれを超え、心理学的自

己から経済学的モデリング、データ物語の領域にまで広がっている。この本の中の、タイトルの Post-Narratology という用語を入れた筆者自身の章 (Ogata, 2022)は、人工知能・認知科学系の物語生成システム研究と歌舞伎等文化的な物語論的アプローチとの融合を示しているが、本稿はその延長上にある「物語生成システムを使った物語乃至小説の制作」の構想と関連する。一方、後者すなわち物語生成研究に関しては、Alhussain and Azmi (2021)は物語生成システムの最新の包括的調査結果を示し、その主要な研究テーマを、①構造的モデル (グラフに基づくアプローチ、文法に基づくアプローチを含む)、②プランニングに基づくアプローチ (目標志向的アプローチ、アナロジーに基づくアプローチ、ヒューリスティック探索アプローチを含む)、③機械学習モデル (ストーリー要約、スクリプト学習・生成、ストーリーの完成、ストーリー生成を含む)、④ストーリーテリングのための知識資源 (ストーリー生成のための知識のタイプ、ストーリーと意味的關係文書、クラウドソーシング知識、常識知識を含む)、⑤面白いストーリーに向けて (ストーリーのサスペンス、物語言説、登場人物、対話、物語テキストを含む)、⑥物語の評価に分けている。筆者の二つの論文が⑤の物語言説の部分で引用されている (Ogata, 2016, Ogata & Yamakage, 2004)。物語言説 (discourse)とはナラトロジーの専門用語であり、物語を語る形式的方法を意味する。それとの関りでは、本稿で取り扱う橋下徹のウクライナにおける戦争を主題とする物語言説は、後述するように、基本的に同じ主題や言明の反復等の技法によって構成されている。ポストナラトロジー乃至物語生成のポストナラトロジーは、その他にも多くの研究領域を関連研究として組織化している。詳細はOgata (2019)や小方 (2022b)を参照されたい。

ポストナラトロジー乃至物語生成のポストナラトロジーは、次のような五部構成の下に発展させて行くことを計画している。その第一部は、仮に「関連研究領域の包括的調査と思想的・哲学的基盤の確立」と名付けられ、ナラトロジー、文学理論、人工知能、認知科学その他の学問領域の融合をはじめとする、研究の思想的・哲学的基盤を発展させる。関連領域の過去から現在にわたる研究状況の包括的調査だけでなく、現今の世界状況の俯瞰と物語論的な整理や、広範囲の物語ジャンルの調査・研究も含み、総じて第二部以降の基

礎を成す。第二部の内容は、「歌舞伎を中心とした物語の調査と分析」であるが、物語生成のポストナラトロジーにとって、物語の調査や分析という作業は、各種の物語生成システムを構築するためだけでなく、物語生成システムを使った物語乃至小説の制作のためにも行われる。ここでの作業は、上述の目標との関りにおいて、歌舞伎やそれと関連付けられたものとしての日本の文学、芸能、物語を中心に調査・分析を行うことである。第三部は端的に「物語生成システム」に関する部門である。統合物語生成システムと芸能情報システムという、相互作用する二つのシステムがその中心を成し、第三部における調査・分析結果は、主の中に組織化され知識資源として使用される。第四部の「物語の制作と流通」は、上記物語生成システムとキャラクター／私の「私」を通じて生成された多様な物語のコンテンツを制作し、社会的に流通させる実践に関連する部門である。次の第五部との違いは、第四部では、特に実験的な物語を多量多彩に生成し、それ自体も実験として各種の媒体を通じて社会的にいわば放出することを目的とすることである。第五部の「私・物語の制作」であるが、第一部から第四部までが研究の方式や機構を確立する部門だとすると、この第五部は方式や機構に基づき実際の作品を制作することを目的とし (第四部もその目的を一部共有するが、そこで実際に重点を置くのは、寧ろ作品の制作と流通の方法の開拓の方である)、研究・開発によって実現された成果を利用した実際の作品の制作方法についてここで述べる。作品そのものは、これ以降の付録的部分に収載するか、あるいは第六部以降を作品そのものの部門にすることを目論んでいる。

以上のように、上記第四部は、物語生成システムを使った物語乃至の制作実験を含む。この物語乃至小説をここでは仮に、従来の人間中心の作品を物語生成システムを使って拡大乃至拡張するという意味で、「拡大小説」と呼ぶことにする (今後名称は変更するかもしれない)。拡大小説は、最初は試行錯誤を通じてその概念をも煮詰めて行く必要があるので、第四部では複数の異なる方法による制作の実験を試みる。第五部は上述のようにこれらを統合した謂わば拡大小説完結版であり、第四部の試行錯誤から見ればその一つのヴィジョンに相当する。

表1 素材として使用したウクライナ戦争を巡る「橋下徹」の Twitter 記事（一部）

日付	Tweet 内容
2022/2/24 10:34	橋下徹氏 日本のロシアへの制裁措置に「経済制裁はあまり意味がなく本当にロシアと対峙するんだったら」(スポニチアネックス) https://t.co/W2ggGZA6U0
2022/2/26 22:02	明日の #日曜報道 THEPRIME は…【安倍元首相が緊急出演！ブーテン氏の思惑と戦略は】#ブーテン 大統領を最もよく知る #安倍晋三 元首相が緊急生出演！ウクライナ侵攻を決めた大統領の思惑と戦略と今後の見通しは？東アジア情勢への影響は？世界と日本がとるべき策とは 出演 #小原凡司 氏 #橋下徹
2022/2/26 23:33	橋下徹氏 NATOとEUの無責任を追及「ウクライナがんばれ！って言葉だけ」(東スポWeb) 本来はNATOが前面に出るべき話。NATO東方拡大に制限をかけるのか、それともロシアの要求を突っぱねて戦うのか。ここまでやっているウクライナの NATO 加盟は認めるんやろな

第五部のためのヴィジョンのレベルにおいて、拡大小説は、幾つかの物語の「場」の上に展開される（小方, 2022a）。単純に三分割すれば、共同幻想的な場、対幻想的な場、個人幻想的な場に分かれる。このうち共同幻想的な場とは、国家をはじめとする社会的な機構を舞台とする場であり、その中には国際政治の場も含まれればメディアの場も含まれる。病院のような場は、共同幻想的な場と個人幻想的・対幻想的な場が接触するような場である。物語乃至小説である以上、これらの場は登場人物によって動かされる。特に共同幻想的な場においては、実在の人物あるいは実在の人物に基づく人物も含まれる。橋下徹という実在の人物は、拡大小説において、現在の日本においてマスコミ等の言説を通じた一定の社会的影響力を持った人物として、取り上げられるのである。小方 (2022d) は歌舞伎における人物の一特性を、舞台上の（役名としての）人物、役者名としての人物、本名としての人物等の多重性に見たが、橋下徹のようなマスコミで活躍する人物にも、そのような複雑な多重性が存在するかも知れない。しかしここでは、個人としての・本名としての橋下徹という人物について取り上げるつもりはなく、あくまで社会的言説を通じた橋下徹あるいは橋下徹によって発信された社会的言説についてのみ取り扱う。そこで、このような意味での橋下徹のことを、以下「橋下徹」と記す。さらに、「橋下徹」の社会的言説としては、2022年2月24日以降の、ロシアによるウクライナ侵略戦争を題材とする Twitter の記事 (tweets) に焦点を当てる。このロシアによるウクライナ侵略戦争は、既に2014年から続いているので、そのような意味ではその一部の期間のみを取り上げるが、より実用的な理由は、「橋下徹」によるこの戦争を巡る Twitter 記事がこの日から急増していることである。これらの記事は必ずしも、その内容の学問的な調査や批判、逆に賛同のために取り上げられる訳ではない。そのことは上の記述から明らかであろう。しかしながら、「橋下徹」もしくはそのモデル化を通じた登場人物が現れる拡大小説においては、

その他の多数の登場人物や、種々の語り手が現れる筈であるので、様々な観点からの賛同や批判が成される筈である。なお、この戦争の名称はまだ不確定と思われるが、以下、「ウクライナ戦争」と呼ぶ。

2. 「橋下徹」の Twitter の調査・分析

以下、橋下徹のウクライナ戦争を巡る Twitter の分析方法について幾つかの項目ごとに述べる。

まず、分析対象であるが、2022年2月24日午前10時34分から同年3月26日午前7時31分までの、「橋下徹」の Twitter 記事のうちウクライナ戦争に関わる記事を素材として用いた。東京大学の鳥海不二夫が2014年に公開した“Web Tweet Crawler” (<http://torix.sakura.ne.jp/twitter/>)を利用して記事の検索と収集を行い、記事が途中で切れている場合はリンク先から残りを補った。収集した記事の総数は578編である。表1に最初の三つを示す。

次に、分析方法について述べる。上記素材のすべての文を対象に、「指示言明」の部分と、「状況認識言明」の部分、その他に分類した。なお、その際、単文の結合、不明瞭な表現の明瞭化等、意味的同一性を損なわない範囲で文や文章の修正を行った。ここで、指示言明とは、「～すべきである」言明とも言うことができ、「橋下徹」自身が、ある対象に対して、何らかの行為 (x に対して「y と協議すべきである」のような形態が多いが、「x は z を信じるべきである」のような内的行為の場合もある) の実行を勧めるような言明を意味する。しかし、勧めること乃至助言と言うより、指示乃至命令のような強い調子のものが大半であり、本当は命令言明と呼んだ方が良いとも思えるが、すべてがそうではないので、やや弱い指示言明という言葉ここでは使用する。もう一つの状況認識言明とは、指示言明を支える、「橋下徹」自身の具体的な社会状況認識や、より一般的な世界観・人間観、さらにマスコミ等からの情報を含む。世界観や人間観も大抵社会的な状況の

認識と共に現れるので、ここでは状況認識言明と呼ぶ。多くの場合、一つの Twitter 記事 (tweet) の中で、状況認識言明と指示言明が共に現れるが、それぞれ一方だけの記事もある。連続した記事群もあり、そのような場合は状況認識言明だけが現れる幾つかの記事が続き、その後の記事に指示言明が現れるというパターンもある。

なお、「橋下徹」におけるウクライナ戦争を巡る言明は、全体として、謂わば「世界大司令官」(世界大の司令官、世界全体を一望・鳥瞰可能な司令官という意味)としての視点に基づいている。すなわち、対象に関連する世界におけるすべての事象を俯瞰・鳥瞰できる主観的立場に「橋下徹」は立ち、その広い意味での状況認識に基づいて、指示や命令すなわち司令を出す語り手、として「橋下徹」を捉えることが出来る。Wikipediaによれば、橋下徹という人物は、「大阪府知事(公選第17)、大阪市長(第19代)、総務省顧問(鳩山由紀夫内閣)、大阪維新の会代表(初代)、日本維新の会代表、同共同代表、維新の党共同代表、おおさか維新の会代表(初代)、同法律政策顧問などを歴任した。」とあるが、現在は、「日本の弁護士(大阪弁護士会所属 登録番号25196)、政治評論家、タレント、元政治家」であるようである。現在日本維新の会の政治家である音喜多駿は、参議院・外交防衛委員会(2022.3.29)において、グレンコ・アンドリーを聴衆の主に関心する国会議員に紹介する際、グレンコ・アンドリーとテレビにおいて論争した橋下徹は、現在日本維新の会とは何らの関係を持たないということを断っていた。しかし今回扱った Twitter の記事群に見られる「橋下徹」における視点は、上述のような「世界大司令官」的なものであり、これは「橋下徹」の政治家体験から来ている癖のようなものかとも思える。成功しているどうかは別として、意識してそうしている可能性もある。しかし真相すなわち橋下徹という人物はこれについてどう考えているのかは分からない。

興味深いのは、この世界大司令官「橋下徹」の物語論的視点は、必ずしも「全知の語り手」ではないという点である。すなわち、物語や小説なら存在するような、個々の対象・主体への想像的な感情や思考の移入は行われず、あくまで「橋下徹」の立場からの指示や命令が行われるだけである。その意味では、限定視点であり、限定視点による全知の語り手、としての「世界大司令官・橋下徹」である。その一極限定視点に基づいている。しかしながら例外的に、プーチン(ロシ

ア指導層)に対する感情移入・思考移入のみはかなり明瞭に存在する。この点も非常に興味深い。

検索・収集した Twitter 記事 (tweets) を、以下ののようなテーマに分類した。これらのテーマは、その中に上記指示言明と状況認識言明とを含んでいる—

EU、NATO、イギリス、ウクライナ(国民)、ウクライナ(若者たち)、ウクライナ(戦闘員)、ウクライナ(非戦闘員)、ウクライナ以外の国特に日本で暮らしているウクライナ人、グレンコ・アンドリー、ジョージア、シヨルツ(ドイツ)、セルビア、ゼレンスキー(ウクライナ、政府)、トランプ、ナザレンコ・アンドリー、バイデン(アメリカ)(プリンケン国務長官)、ポーランド、マクロン(フランス)、ロシア(プーチン)、ロシア(国民)、威勢のいい人たち(己の主張を勇ましく叫ぶ人たち)、一部ネット発音者、外国で暮らすウクライナ人、学者(抽象的・一般的)、義勇兵、義勇兵に志願した人たち、橋下徹、金正恩、国際社会、国連、細谷、死ぬリスクのない者たち、自衛隊・海上保安庁のみなさん、篠田(英明)／国際法の学者、主体不明(橋下?「~と考える」)、政治家(抽象的)(~私私的)、政治・学者エリート、政治運営(者)／国家運営(者)、政治家(西側諸国)、政治家、専門家(日本、西側諸国)、政治家の取り巻き学者(日本人)、西側諸国(国民)(西側諸国民)、西側諸国、専門家(西側諸国)、専門家(多数)(日本人)(抽象的・一般的)、専門家(日本)、戦う一択を叫んでいた人たち、戦争指導者(層)、戦地外の人間、舛添要一、前仏大統領、太平洋戦争時の戦争指導者たち、中国、日本と国際社会、日本の完全自衛戦争を主張している人たち、日本国民(太平洋戦争時)、日本人(国会議員、日本政府、朝日社員、寺島氏)、日本人(抽象的・一般的)、日露議員同盟、報道、民主国家

本稿では、このうち「NATO」のテーマのみを取り扱う。「NATO」における指示言明のテーマは、さらに以下のように細分類される(括弧内は記事の数)—

ウクライナ(ゼレンスキー)(11)、NATO・前面、主体(11)、ロシア(30)、東方拡大(2)、加盟(5)、プーチン(13)、譲歩(12)、政治的妥結(50)、中国(17)、ポーランド(3)、負担(22)

以下は、「NATO」の指示言明の一部の例である—

- ウクライナだけに犠牲を負わず、NATOも関与してヨーロッパの安全保障の枠組みを作るべきである。
- NATOや核五大国が政治的に解決するべきである。
- NATO・西側の政治家はウクライナの安全を守るヨーロッパの安全保障の枠組みをロシアと作るべきである。
- NATO・西側の政治家はウクライナの安全を守るヨーロッパの安全保障の枠組みをロシアと作るべきである。
- プーチンの最終目標が本当にNATOの東方拡大の阻止なのであれば、ウクライナに全責任を負わせ戦わせないために、NATOはロシアに譲歩して攻撃を止めさせるべきである。
- ウクライナ大統領は即座のNATO加盟は期待せずと言っているが、このようなことはNATOとロシアの政治の話である。
- NATOはプーチンと折衝するべきである。
- 今回の戦争がヨーロッパの安全保障の枠組みを巡っての政治の失敗が主な原因であれば、NATO・西側の政治家は少しは責任を感じて悪魔のプーチンと政治をし、ウクライナの安全を守るヨーロッパの安全保障の枠組みを作るべきである。
- NATOは東部地域のウクライナの主権を守ることと譲歩とのロシアとのトレードオフを考えるべきである。
- 核保有国ロシアには喧嘩できず、ロシアと喧嘩ができない

なら政治的妥結をはかるべきであり、強い相手に何もできないなら、人道だなんだと綺麗事を言うべきではない。

同じく、「NATO」テーマの状況認識言明は以下のよう分類される（括弧内は記事の数）—

譲歩 (4)、東方拡大 (9)、プーチン (10)、中国 (9)、加盟 (5)、ウクライナ(ゼレンスキー) (12)、ジョージア (2)、ベラルーシ (3)、ロシア (37)、キューバ危機 (3)、政治的妥結 (3)、NATO (5)、国民投票 (3)、その他 (4)

以下は、状況認識言明の一部の例である—

- 東部地域の話は、ウクライナの負担とNATOの譲歩がトレードオフの関係にある。
- 橋下は、西側諸国の人間として西側の体制が全世界に広がることを望んでいるし、ロシアにも中国にも民主的な国になってもらいたい、向こうは“西側の方がおかしい”という主張で、価値観も見方もまったく違い、そういう中でプーチンは“NATOの東方拡大をやめてくれ”と言ってきたが、NATOは一切聞かず、“加盟するかどうかはウクライナの主権なんだから、約束なんかできない”と言い続けて来、そうやってNATOは体面を保とうとしてきたのに、ウクライナにロシアが入ってきた瞬間、EUと一緒に“ウクライナ頑張れ!”って言っており、それはおかしい。
- オリバーストーンによるプーチンインタビューにおいては、当初NATOと協力しようとしたが、その後NATOとこじれていくプーチンの怒りの様子が表れており、これは真実である。
- NATOも西側諸国も卑怯の極みだし、正義ばかり唱えて中国を取り込む政治ができていない。
- NATOはウクライナの加盟についてロシアに約束することはないと突っぱね、NATOに加盟していないウクライナが狙われた。
- もちろんモルドバ、ジョージアはロシアに狙われるでしょうが、NATOに入れるか、ロシアを瓦解させない限りロシアの侵攻リスクはずっとついて回り、やはり協議が必要になってくる。
- NATOとロシアがヨーロッパの安全保障の枠組みでつば競り合いをやっていた一端の流れのウクライナ・ロシア戦争であり、ロシアの暴挙は許されないが、この本質を見誤ると解決策を間違える。
- NATOとロシアの安全保障のぶつかり合いの考察に東方不拡大の約束の有無の議論は無意味であり、約束があったかどうかにかかわらず、ロシアが脅威と感じたかどうかの問題であり、キューバ危機時のキューバ内ソ連核兵器の配備も、東欧州SSミサイルの配備も、韓国内サードミサイルの配備も、配備しない確約はなかった。
- バイデン・NATO政治の最大の問題は覚悟もないのに脅しを使うことであり、口だけであり、中露に見透かされている学級委員政治であり、この感覚は元政治家の感覚では理解不能である。
- 次はいつ国民投票するかを政治ポイントであり、これは一般国民の被害拡大レッドラインを定めることになり、これが戦争指導の重要ポイントである。

なお、今回、状況認識言明のテーマ分類については、指示言明とセットになっている部分のみを対象とした。それ以外に、特定の指示言明に結び付かない、状況認識のみの文や記事も多数存在する。それらのテーマ分類を行えば、上記のセットはより拡張されると思われる。

3. 組み合わせ的生成の実験

筆者は上記にその一部が示されている「橋下徹」の意見に対しては、断片的な部分を除き、少なくともその全体構成にはほぼ全く賛同しない。殆ど、所謂陰謀論の領域に入っていると考えており、もし「橋下徹」が今回の本当の「戦争指導者」（本人の用語）になり、ウクライナ戦争を、世界の警察官以上の世界大・司令官の立場から指導していたら（現実問題としてはあり得ないが）、悲惨なことになるか、あるいはロシアとプーチンの一人勝ちとなっていたと推測する。ウクライナは現状において悲惨であるが、それ以上の悲惨な現実がウクライナの人々にとっては生じたであろう。もう「ウクライナ人」もウクライナの国土も消滅していたかも知れない。そもそもの最初から、それを目的とした言説であったかも知れず、その場合、それを云々したからと言って批判にも相当しないのかも知れない。但し、民間人の生命を守るための「民間人救出作戦」専属の司令官として「橋下徹」を据えるという可能性が想像できない訳ではない。「NATO」テーマの部分にはあまり含まれていないが、「橋下徹」はTwitterの他の部分で、生命尊重原理主義に基づきゼレンスキー大統領に向かって早急に戦争を終結させるように説教する等の暴論を展開しているが、冷静に考えてみれば、人工急減時代を迎えた日本は、そのような意味でも生命を大事にしなければならないし、ロシアにとっても、ソ連時代のような大虐殺に満たされた世界は早く過去のものにして行かなければならないのである（プーチンが、人口の心配をすることなく大量殺人の快楽に酔い痴れていたスターリンの真似を21世紀にしているということ自体、そのどうしようもない「狂気」を明かすものである）。もし「橋下徹」が、ロシアのような国を相手にそれをしなければならなくなったとしたら、歴史認識もさらに徹底的に鍛え直さなければ済まないような状況に、「橋下徹」は置かれるようになるだろう。日本における「戦争指導」において、そのような司令官の職掌は必須であるとも考えられる。その点では「橋下徹」は、確かに戦争に関する新しい、これまで見過ごされていた観点・論点を発見乃至発明したと言えるかも知れない。しかし何れにせよ、ここでの目的は、「橋下徹」の言説を直接的に批判・論評することではないので、議論を前に進める。

前述の研究体系の構想における第五部に関して述べたように、筆者は物語生成システムを使った物語乃至

小説(拡大小説)の制作の構想と実践を進めているが、最終的に構想している「私・物語」と仮に呼んでいる物語乃至小説(所謂私小説ではない)(小方, 2022f)は、前述のように(またあらゆる物語や小説がそうであるように)社会的な事象や私的な事象が綯い交ぜになったものである。その中の社会的な事象には、現在進行形及び歴史的な様々な事象が含まれるが、現在進行形の社会的な事象を構成する一つの要素として、筆者は実在の人物のモデル化に基づく登場人物を複数設定したいと考えており、このような文脈において、「橋下徹」も現在の日本の社会状況を象徴する一つの典型として捉えられる。

因みに、なぜ「橋下徹」を選んだかと言うと、ウクライナ戦争を巡るマスコミやTwitterにおける言説を幾つか見て、怒りや驚きや「呆れ」を中核とする感情を抱き、しかしこのような、杜撰な言説をマスコミを中心に垂れ流し続ける人物(またそのメディアとしてのマスコミ等も含めて)が一定のまた広範な社会的影響力を持っていることの中に、現在の日本社会のある特色が現れているのではないかと考えたからである。同時に、「橋下徹」の言説の中に、上述の「民間人救出作戦専属司令官」の類の、興味深い論点・観点乃至アイデアが含まれていることも否定できない、とも考えられた。登場人物の造形として目指しているのは、「橋下徹」的なものを抽出した一つのモデルであり、より一般化されたものであり、本稿はそれに向かう最初の試行である。

物語生成システムを使った物語乃至小説(拡大小説)については、現在試行錯誤を行っており、最終的にどのような形態になるのか今予測出来ないが、どのようにして物語生成システムが使用されるのかに関しては、ある方針を持っている。今行っている試行では、全体の構成は筆者自身が作り、その中身は筆者自身の純粋な人間としての思考と、何種類かの物語生成システム(あるいはその機構もしくは機能)による断片に基づいて文章化している。物語の全体構成をシステムによって作るという方法もあるだろうし、両者を融合するという方法もあるだろう。登場人物としての「橋下徹」において重要なのは、社会的言説の部分であり、何らかの形で知識化された、そして生成された、「橋下徹」的な言説を、物語の中で使用して敷衍することを目論んでいる。そこで本稿では、前節で述べたような形で整理されたTwitterに基づく文を組み合わせ文章化するという単純なシステムを試作する。

そのアルゴリズムを以下に示す。

1. 任意のテーマ・キーワード(前節に示した)と一致する「状況認識」記事群から、テキストを一つ取得し、生成文章の最後尾に追加する。
2. 上記テーマ・キーワードと一致する「すべき」記事群を検索し、見つかった「すべき」記事群から、乱数的にテキストを一つ乃至二つ取得し、生成文章の最後尾に追加する。
3. もし、テーマ・キーワードと一致する「すべき」記事群がない場合(そのテーマ・キーワード自体がない場合)、あるいは空の場合(既に使い切ってしまった場合)、他の空でない「すべき」記事群から、残りのテキストの数が最も多いものを優先して選択し、乱数的にテキストを一つか二つ取得し、生成文章の最後尾に追加する。
4. 以上の取得テキストを、「状況認識」記事群及び「すべき」記事群から取り除き、記事がまだあれば1に戻り、なければ終了する。

なお、このアルゴリズムにおいて、「状況認識」及び「すべき」は、それぞれに分類されたテキスト(記事)を格納したリストである。同じく、上記2,3において、63サイクルまではテキストを二つ取得し、それ以降は一つのみ取得するものと決める。また、「状況認識」のテーマ・キーワードは、残りのテキストの数が最も多いものを優先して選択する。

筆者のポストナラトロジーが目指す物語乃至小説(拡大小説)には、「橋下徹」以外にも多数の登場人物が出て来る必要があり、また「橋下徹」は拡大小説の中で、その他の人物や言説との一種の闘争関係の中に存在することにならなければならない。物語の作り手すなわち筆者の立場からは、「橋下徹」が取り上げたテーマに関するその他の意見や思想、その批評・批判、逆に賞賛・賛美等を含め、多様な、様々な視点や立場に基づく、諸情報が関連して現れて来てくれるとありがたい。そこで、一種の説明文章として、ウクライナ戦争、特にここではNATOの役割や位置付けに関する「橋下徹」の意見や思想とは異なる意見・思想として、米国政府によって2022年1月20日に公表された文書(U.S. Department of State, 2022)から、NATOに関する三種類の記事を、上記アルゴリズムによって組み合わせ的に生成された文章の途中に挿入する機能を付加する。参考までに、上記記事を英文のまま次に引用しておく

(注と図は省略) —

FICTION: NATO has plotted against Russia since the end of the Cold War, encircled Russia with forces, broken supposed promises not to enlarge, and threatened Russia's security with the prospect of Ukrainian membership in the Alliance. [vi]

FACT: NATO is a defensive alliance, whose purpose is to protect its member states. All Allies reaffirmed at the June 2021 Brussels Summit that “the Alliance does not seek confrontation and poses no threat to Russia.” In fact, in 2002 President Putin himself stated “Every country has the right to choose the way it ensures its security. This holds for the Baltic states as well. Secondly, and more specifically, NATO is primarily a defensive bloc.”

(FACT:) NATO does not encircle Russia – Russia's land border is just over 20,000 kilometers long. Of that, less than one-sixteenth (1,215 kilometers), is shared with NATO members. Russia has land borders with 14 countries. Only five of them are NATO members.

In response to Russia's use of military force against its neighbors, NATO deployed four multinational battlegroups to the Baltic States and Poland in 2016. These forces are rotational, defensive, proportionate, and requested by the host nations. Before Russia's illegal seizure of Crimea, there were no plans to deploy Allied troops to the eastern part of the Alliance.

(FACT:) NATO never promised not to admit new members. NATO enlargement is not directed against Russia. Every sovereign nation has the right to choose its own security arrangements and to enter into defensive regional alliances for purposes of self-defense. This is a fundamental principle of European security, reflected in the UN Charter, and is one that Russia has affirmed in myriad international and regional instruments such as the Helsinki Final Act.

上の英文に示されているように、この記事は2014年以降の、そして予測されるロシアによるウクライナ侵略戦争に関連する、ロシア政府の言説の FICTION (虚構) と、それに対する FACT (事実) とを併記したものであり、米国政府がロシアによる決定的な暴力行為を予測して世界に向けて発信した文章である。生成システムの中ではこれを google 翻訳したものを最低限修正した日本語を使用するので、日本語としての質は悪いが、今後改善する。また、その挿入は今回は、以下の実例文の中に人手で任意に行っただけであるが、従来から行っている物語への説明文挿入の研究 (Ono, Kawai, & Ogata, 2020) を参考に、今後方法を考えて自動化する。以上のアルゴリズム及び説明挿入によって、毎回異なる橋下徹言説が組み合わせ的に生成される。すべての文を一回必ず使用するので、毎回必ず A4 で 15 ページ近くになるが、以下に説明文を任意に四つ挿入した生成例の一小部分を示す (《》に挟まれた斜体が挿入された説明文である) —

戦争になる前にヨーロッパの安全保障の枠組みとして NATO とロシアで政治的にケリをつけておくべきだった話であったが、政治の失敗で非戦闘員が犠牲になっているが、解決方法は戦闘ではなく NATO はロシアと政治的妥結を行うべきである。NATO・西側の戦争指導・戦略に合理性はなく、本当にウクライナを助け

るためにはゲームチェンジするほどの強力な兵器を供与してあげなければならないが、ロシアとの戦争を避けるためにそれはしない。NATO がロシアと一定の政治的妥結をし、戦争を終わらせるべきである。NATO はヨーロッパの安全保障の枠組みについてのロシアと政治的妥結をするべきである。NATO とロシアがヨーロッパの安全保障の枠組みでつば競り合いをやっていた一端の流れのウクライナ・ロシア戦争であり、ロシアの暴挙は許されないが、この本質を見誤ると解決策を間違える。《なお、参考のために、アメリカ政府が出している NATO に関する公式見解を引用しておきましょう—虚構: NATO は冷戦の終結以来ロシアに対して陰謀を企て、ロシアを軍隊で包囲し、拡大しないという約束を破り、ウクライナの同盟加盟の見通しをもってロシアの安全を脅かした。》本当に必要なウクライナ支援は NATO の軍事介入が政治的妥結であるが、前者は世界大戦になるので無理なので、NATO はロシアと後者の政治的妥結を図るべきである。NATO はロシアとの間でウクライナを含めたヨーロッパの安全保障についての政治的妥結を行うべきである。ロシアは飛行禁止区域なければ NATO 圏を攻撃すると言っている。政治的妥結ありえるなら NATO の出番である。NATO・西側諸国がロシアと政治的妥結をはかるべきである。ロシアの暴挙は許されないが、ただし今回の戦争は NATO とロシアのつば競り合いから生じたものである。NATO が軍事力をちらつかせて、ロシアと政治的妥結をするべきである。NATO・西側はロシアと向き合っウクライナを含むヨーロッパの安全保障の政治的妥結に動くべきである。NATO 東方拡大は誰も否定していない。《繰り返しになりますが、参考のために、アメリカ政府が出している NATO に関する公式見解を引用しておきましょう—事実: 「NATO は防衛同盟であり、その目的は加盟国を保護することである。」すべての NATO 同盟国は、2021 年 6 月のブリュッセル首脳会議で、「同盟は対立を求めておらず、ロシアに脅威を与えていない」と再確認した。実際、2002 年にプーチン大統領自身次のように述べている—「すべての国は自国の防衛を確保する方法を選択する権利を持っている。これはバルト諸国にも当てはまる。」第二に、より具体的には、NATO は防衛ブロックである。》NATO は東方拡大に制限をかけるか、ロシアの要求を突っぱねて戦うべきである。プーチンの最終目標が本当に NATO の東方拡大の阻止なのであれば、ウクライナに全責任を負わせ戦わせないために、NATO はロシアに譲歩して攻撃を止めさせるべきである。この米元駐露大使は、今回のプーチンの暴挙は NATO の東方拡大が原因ではなく、ウクライナの 2014 年の尊厳革命(民主革命)が原因だと言ったが、これはひどい誤りである。《しつこいですが、参考のために、アメリカ政府が出している NATO に関する公式見解を再度引用しておきましょう—事実: 「NATO はロシアを取り囲んでいない—ロシアの国境は 2 万キロメートル強ある。」そのうち、16 分の 1 (1,215 キロメートル)未達が NATO 加盟国と共有されているだけである。ロシアは 14 カ国と国境を接しているが、NATO 加盟国はそのうち 5 国に過ぎない。ロシアが近隣諸国に対して軍事力を行使したことに対応して、NATO は 2016 年にバルト三国とポーランドに 4 つの多国籍戦闘群を配備したが、これらの軍隊は交代、防衛、分担であり、当該国から要求されたものである。ロシアがクリミアを不法占領する前、連合軍を同盟の東部に配備する計画はなかった。》ウクライナの安全の保証は NATO とロシアの政治的妥結によるべきである。西側・NATO はロシアと安全保障の枠組みについて政治的妥結をはかるべきである。ウクライナが一番求めているものを西側・NATO は、ロシアとの戦争を恐れてやらず、自分たちの安全を脅かさない範囲のことしかやらずにウクライナとともにある！と叫ぶのは欺瞞である。NATO が世界大戦を恐れウクライナに強力な武器を提供できないなら、ロシアとの政治的妥結を探るべきである。各民主国家の政治家は国民の強く大きな運動で動く場合があるので、NATO のロシアとの政治的妥結は運動にするべきである。《もう一度、参考のために、アメリカ政府が出している NATO に関する公式見解を引用しておきましょう—事実: 「NATO は新メンバーを認めないことを決して約束していない。NATO 拡大はロシアに対して向けられているものではない。」すべての主権国家は、独自の安全保障協定を選択し、自衛のために防衛的な地域同盟を結ぶ権利を有する。これは、国連憲章に反映されている欧州の安全保障の基本原則であり、ロシアもヘルシンキ最終法等多くの国際的及び地域的文書で確認している。》戦争を止める強制力のある司法権が国際社会に存在しない以上、文書の存在を持ち出しても意味が

なく、ロシアはブタペスト覚書違反だが、それを言えばベラルーシへの経済制裁も同覚書違反と言われ、イランの核合意を壊したアメリカは南オセチア、ウクライナ東部の独立を西側諸国は認めない。経済制裁が効いてロシアが瓦解するまでウクライナに戦ってもらったり方だけでなく、NATO とロシアが安全保障の枠組みについて政治的妥結をはかるやり方もあり、後者を選ぶべきである。政治的妥結ありえるなら NATO の出番である。」

4. 考察

NATO を巡る「橋下徹」の言説を要約すれば、「この戦争の原因は、NATO が東方拡大し続けて来、ロシア・プーチンが再三それに抗議し続けて来たにも拘らず、NATO が無視してロシア・プーチンと協議せず、とうとうロシア・プーチンが堪忍袋の緒を切らせたことにある。選択肢は非常に少ないのだから、例えば、西側が徹底的に武器を供与しウクライナが徹底抗戦したり、あるいは西側が徹底的に経済制裁をすれば、ロシア・プーチンは怒って原爆のような危険なものを使うだろうから、NATO と西側（欧米）（ウクライナが入ることは殆ど想定されない）は、ロシア・プーチンに譲歩・「お土産」を与えつつ、さらに中国をも中に入れて協議し、「政治的に」妥結（妥協）し、戦争を終わらせるべきである。その結果、ウクライナの中立化乃至緩衝地帯化がもたらされる。」となる。

この種の NATO 東方拡大原因論を唱える論者はかなりたくさんいる。例えば、フランス人のトッド (2022) はミアシャイマーの論を引用しつつ、NATO からさらに話を敷衍してアメリカがこの戦争の真の原因であることを主張し、トッドと共著を出したこともある藤井 (2022) も NATO の「東方拡大」によるプーチン・ロシア政府の恐怖を感情移入的に表現している。一方で、これに反対する論者もいる。例えば、山添 (2022a) は「NATO 拡大脅威」の言説には、中核に真実が含まれる。NATO の攻撃的戦力配置がロシアの国境にかなり近ければ、それは危険でロシアを挑発するものだろう。国際関係論のリアリズムに基づく見解の識者がそれを指摘してきたのは正しい。しかし「NATO 拡大脅威」の範囲がのちに拡張してしまい、その中にある真実の割合が低下してしまった。」／「2022 年 2 月、プーチン大統領は帝國的野心を優先してウクライナに全面侵攻し、NATO との課題を解決することを拒絶した。これには、合理的計算をできなくなってしまったから、ロシア・ウクライナの統合に過剰な感情を注ぎ込んでいるから、「NATO 拡大脅威」の言説に本物の中身がなかったから、などの理由が考えられる。いずれにしても、今や我々は「NATO 拡大脅威」の言説をそのまま

ロシアの動機として許容することはできない。その言説に含まれる虚構部分を拒絶し、真実のロシア国益は何かを見極めながら、今後の決着のあり方を考えていくべきだろう。」と述べている（さらに山添 (2022b)）。また、前出の、テレビ番組で橋下徹と論争したこともある、日本在住のウクライナ人で、日本文化論と現代政治の研究者・評論家であるグレンコ・アンドリー (2021) は、NATO 東方拡大原因論をより明確にデマであるとしている。そもそも、前節で紹介したように、米国政府の側は、2月24日以前の段階において、ロシアが主張する NATO 東方拡大原因論は、ロシア・ウクライナ問題を巡る、根拠のない虚構・fiction であり disinformation narratives すなわちデタラメ物語の一つであると規定している。

総じて、「橋下徹」の Twitter 記事には、自分の意見に対する反論や異論の併記は殆ど見られず、論争はしばしば存在するが、その目的は議論によって話の内容を深めることではなく、自分の固定した意見・思想をもとに「敵」である相手を徹底的に論駁することであり（埴谷雄高が政治の原理としてしばしば記述する「奴は敵である。敵を殺せ。」という標語を思い出す）、殆ど論駁すること自体が目的であって、そのためには誹謗中傷や罵詈雑言という物語言説技法も頻繁に駆使され、それに対する批判に対しては大抵、自分がやられたからやり返す、というプーチンやロシア政府と類似した論法が活用される。多くの場合、「橋下徹」の「論争」相手は、恐らく嫌気が指した不毛さを感じ、途中で下りてしまうのだろう。相手を途中で勝負のリングから下ろす、ということも「橋下徹」から見れば勝利の証明であるのかも知れないが。（本当は議論したいのであるが、多くの相手が議論してくれないという意味のことも「橋下徹」は Twitter で述べている。）

このように考察は、内容的なもの（物語言説技法としての）なもの（物言説技法としての）なものの両方が不可分に交じり合うものになってしまいがちであるが、それを厭わず、その他気付いたことを順不同で述べれば、一つに歴史意識の欠如、そこまで言わないとすれば、誤解が混ざっている気がする。例えば、今回扱った「NATO」のテーマとは別の部分で、「橋下徹」は、「ウクライナは旧ソ連の蛮行の歴史への恐れがある。他方ロシアには推定 2700 万人の犠牲者を出した独ソ戦の歴史から西側の拡大へ西側諸国民の想像を絶する恐怖があるのかもしれない。」（3月5日）、「ロシア侵攻前の CNN のロシア人意識調査によれば、NATO 東方拡大を阻止するために

武力行使をやってもいいというロシア国民は50%いた。約2700万人の犠牲者を出した独ソ戦の歴史から、西が東に拡大することの恐怖心は我々には想像できない《い》ものがあるのだろう。」(3月6日)と書いており、筆者は、これが「橋下徹」がロシア・プーチンに感情移入したがる理由なのではないかと感じた。すなわち、ここで橋下徹は、2700万人の犠牲者(死者)が、1941年から1945年にかけての独ソ戦時、ドイツ(ヒトラー)の文字通り「東方拡大」の犠牲になって死んだロシア人の数であり、これをNATOの「東方拡大」(上述の通り、米国側の記事によればそれは単なる虚構である)と重ね合わせ、ロシア人における「東方拡大」からの恐怖感を正当化する論拠にしているように見える。2700万人という数自体にも議論があるが、独ソ戦時に膨大な人数の「ソ連人」が死んだという事実は変わらない。「橋下徹」は以上の文章の中で、「ロシア人」と「ウクライナ人」を分けていないようであるが、勿論この死者の中には膨大な数の「ソヴィエト・ウクライナ人」が含まれる(「ソヴィエト・ロシア人」ではない)。すなわちこの数は「ソ連人」の犠牲者数であり、その中に占める「ウクライナ人」の比率は「ロシア人」の比率より明らかに大きい。そもそも第二次世界大戦がヒトラーとスターリンによる「政治的妥結」としてのモロトフ・リッベントロップ協定に基づくポーランド(の勝手な「協議」に基づく)分割に端を発していたことを省みれば、2700万人の死者は単にドイツ・ヒトラーの犠牲者だけではなく、その中にはスターリン(ソ連)による犠牲者も多数含まれるのである。また、独ソ戦以前から、独ソ戦の最中においても、さらにそれ以降も、ソ連においてはスターリンによる「民族浄化」が、ナチス・ヒトラーによる同じく民族浄化と並行して行われていたことを忘れてはならない。1933年頃、ソヴィエト・ウクライナ人だけでも最低330万人がスターリンに餓死させられたと言われる所謂ホロドモールもその一環である。このように、「民族浄化」の一大ターゲットは「ソヴィエト・ウクライナ人」であった(スナイダー(2015)の下巻 pp.163-168 に概要)。「橋下徹」は「そんな一般に公になって歴史的事実位自分も当然知っている」という意味のことを言っていた(北村・橋下, 2022)ので蛇足ではあろうが、独ソ戦におけるソヴィエト・ウクライナ人の犠牲は、数年前のホロドモールやヒトラーを引き継いだ「ソ連・スターリンによる」ユダヤ人虐殺の記憶にも結び付いているだろうことは容易に想像される。しかし、佐藤優が、「ソヴィエ

ト・ウクライナ人」のロシア語作家であり、ウクライナ人を主人公や主要登場人物とする小説においてスターリニズムを徹底的に、能う限り具体的に批判したワシーリー・グロスマン(2012, 2013)の独ソ戦におけるスターリングラード攻防戦の報道に取材した『赤軍記者グロスマン』(ビーヴァー, 2007)の帯において、「この本には戦争という非常事態の下における普通のロシア人の悲しみ、怒り、喜び、愛が描かれてる。/日本人がロシアという国家とロシア人の内面的論理を知たるための最良のテキストだ。」と書いてしまったように、「ソ連人」ではなく「ロシア人」の中に「ウクライナ人」も含めて考えてしまう感性が普及しているので、「橋下徹」も、ロシア人という一つの同質集合体がヒトラー・ドイツの東方拡大から恐怖を感じ、それがトラウマとなってNATO東方拡大にロシア・プーチンや現在のロシア人も多大な脅威を感じるという誤った歴史観を開陳してしまったのだろう。端的に言えば、これは現実と歴史との虚構的なアナロジーに基づく嘘である。また、「プーチン」や「ロシア人」や「ロシア国家」に対して、以上のように間違った論理に基づくものとはいえそれだけ感情移入するのであれば、現在のウクライナ人(ソヴィエト・ウクライナ人ではない)がソ連のスターリニズムやそれを継承したプーチンに抱く絶大な恐怖心の方こそ真摯に感情移入すべきである。

もう一つ重要なのは、橋下徹にとって、ロシア・プーチンは主体であるが、ウクライナは主体ではなく、徹頭徹尾客体であり、被害者であり、犠牲者であるということである。プロップ(1987)によって分析されたロシア昔話の構図に当てはめて考えれば、橋下徹の構図において、ロシア・プーチンは英雄の「主人公」であり、ウクライナ・ゼレンスキーは蛇に誘拐された王女すなわち「被害者・犠牲者」なのである(小方, 2007)。従って、ウクライナは一方向的に救済されるべき対象であり、その救済の主体は、ロシア・プーチンと、「援助者」や「助手」であるNATO(アメリカ、西洋諸国が含まれる)、そしてなぜか中国・習近平なのである。そして、喧嘩のやり方の上手な脇役として、トランプや北朝鮮・金正恩さえ登場人物の中に含まれている。ウクライナ、そしてその仲間であるポーランド、モルドバ、ジョージア等は、徹底的に「被害者・犠牲者」として、「橋下徹」に同情の眼で見られるだけである。橋下徹の論述からの印象では、バイデン・アメリカ大統領など定めし最後にボロカスに扱われる「偽主人公」

そのものであろう。因みに、藤井 (2022b)は、世間にはゼレンスキー=善、プーチン=悪とする通俗的な物語が蔓延・跋扈していると何の根拠もなく純粹主観的に主張しているが、藤井自身の論は「橋下徹」の論と同様、その骨組みにおいて、上のように解釈されたプロップ・ロシア魔法昔話と同型である。

5. 結言—結論と今後の課題—

以上、筆者のポストナラトロジー乃至物語生成のポストナラトロジーの構想を述べ、その一目標である拡大小説のための登場人物造形の一環として、「橋下徹」のウクライナ戦争に関する Twitter 記事を集め、それを分類・整理し、組み合わせて文章を生成し、その中にそれへの批判の文章を挿入するシステムを作った。今後は、「橋下徹」のウクライナ戦争を巡る Twitter 記事の収集・分析を拡張し、より自動的な方法を入れてシステムを拡張し、その結果を拡大小説を準備するための物語乃至小説制作実験において利用する。

文献

- Alhussain, A. I. & Azmi, A. M. (2021). Automatic story generation: A survey of approaches. *ACM Computing Surveys*, 54 (5), 1-38.
- グレンコ・アンドリー (2021). NATO の教訓—世界最強の軍事同盟と日本が手を結んだら—. PHP 研究所.
- アリストテレス, 松本仁助・岡道男 (訳) (1997). 『アリストテレス詩学 ホラーティウス詩論』. (pp. 7-222). 岩波書店.
- アントニー・ビーヴァー, 川上洸 (訳) (2007). 赤軍記者グロスマン—独ソ戦取材ノート 1941-45—. 白水社.
- Dawson, P., & Mäkelä, M. (Eds.) (2022). *The Routledge Companion to Narrative Theory*. New York: Routledge.
- 藤井聡 (2022a). (テレビ番組)【東京ホンマもん教室】ウクライナ侵攻と尖閣. (2022.3.26 放送).
- 藤井聡 (2022b). 「新」経世済民新聞メルマガ, 「ウクライナ」からの教訓～来たるべき“有事”にどう備えるか? (2022.6.18 配信).
- ワシーリー・グロスマン, 齋藤紘一 (訳) (2012). 『人生と運命 1-3』. みすず書房.
- ワシーリー・グロスマン, 齋藤紘一 (訳) (2013). 『万物は流転する』. みすず書房.
- 北村晴男・橋下徹 (2022). (テレビ番組)【NewsBAR 橋下 #169】ウクライナ情勢・橋下徹×北村晴男「戦うより政治的妥結」論に北村晴男が異議! 橋下徹との激論で両者プチギレ?
- 小方孝 (2007). プロップから物語内容の修辞学へ—解体と再構成の修辞を中心として—. 『認知科学』. 14(4), 532-558.
- Ogata, T. (2016). Computational and cognitive approaches to narratology from the perspective of narrative generation. T. Ogata & T. Akimoto, Eds. *Computational and Cognitive Approaches to Narratology*, 1-74. IGI Global.
- 小方孝 (2019a). 日本の物語論・文学理論の物語生成システムへの取り組みに向けて. 『日本認知科学会第36回大会発表論文集』, 442-451.
- Ogata, T. (2019b). Toward an Integrated Approach to Narrative Generation: Emerging Research and Opportunities. IGI Global.
- 小方孝 (2020). 物語の総合システムとして見た世阿弥の能楽思想—序論—. 『2020年度日本認知科学会第37回大会』. 755-764.
- 小方孝 (2022a). 「"SMクラブ日本"の段(もしくは場)」の構成のための原初的考察—またはSM(クラブ)国家論から見る現在日本国家の物語生成—. 『第68回人工知能学会・ことば工学研究会資料』. 93-167.
- 小方孝 (2022b). 『物語生成のポストナラトロジー—人工知能の時代のナラトロジーに向けて2』. 新曜社.
- 小方孝 (2022c). 序言 ポストナラトロジーおよび物語生成のポストナラトロジー. In 小方孝, 『物語生成のポストナラトロジー—人工知能の時代のナラトロジーに向けて2』. pp. 1-44. 新曜社.
- 小方孝 (2022d). 第2章 歌舞伎、ポストナラトロジーとプレナラトロジーの融合. In 小方孝, 『物語生成のポストナラトロジー—人工知能の時代のナラトロジーに向けて2—』, pp. 75-126. 新曜社.
- 小方孝 (2022e). 第3章 日本のナラトロジーと文学理論への序説、ポストナラトロジーとプレナラトロジーの融合. In 小方孝, 『物語生成のポストナラトロジー—人工知能の時代のナラトロジーに向けて2—』, pp. 127-186. 新曜社.
- 小方孝 (2022f). 第5章 流動—固定と私・物語. In 小方孝, 『物語生成のポストナラトロジー—人工知能の時代のナラトロジーに向けて2—』, pp. 235-281. 新曜社.
- Ogata, T. (2022). Concepts and Aspects of an Integrated Narrative Generation Approach Based on Post-Narratology (Chapter 31). In Dawson, P., & Mäkelä, M. (Eds.). *The Routledge Companion to Narrative Theory*. Routledge.
- Ogata, T. & Yamakage, S. (2004). A Computational Mechanism of the “Distance” in Narrative: A Trial in the Expansion of Literary Theory. Proc. of the 8th World Multiconference on Systemics, Cybernetics and Informatics (SCI 2004), 179-184.
- Ono, J., Kawai, M. & Ogata, T. (2020). Implementation of an Explanation Generation Mechanism Using Attribute Frames and a Noun Conceptual Dictionary. *2020 The 3rd International Conference on Computational Intelligence and Intelligent Systems (CIIS 2020)*, 48-50.
- ミシェル・オクチュリエ, 桑野隆・赤塚若樹 (訳) (1996). 『ロシア・フォルマリズム』 白水社. (原著: 1994)
- プロップ, ウラジーミル, 北岡誠司・福田美智代 (訳) (1987). 『昔話の形態学』 白馬書房. (原著: 1928)
- Sommer, R. (2012). The merger of classical and postclassical narratologies and the consolidated future of narrative theory. *Diegesis*, 1(1).
- ティモシー・スナイダー, 布施由紀子 訳 (2015). 『ブラッドランド—ヒトラーとスターリン 大虐殺の真実—(上下)』. 筑摩書房. (Timothy Snyder (2010). *Bloodlands: Europe between Hitler and Stalin*. Basic Books.)
- エマニュエル・トッド (2002). 日本核武装のすすめ. 『文藝春秋』 2020年5月号, pp. 94-104.
- U.S. Department of State (2022). Fact vs. Fiction: Russian Disinformation on Ukraine (FACT SHEET, OFFICE OF THE SPOKESPERSON, JANUARY 20, 2022)
- 山添博史 (2022a). ロシアの「NATO 拡大脅威」言説における真実と誇張. 『NIDS コメンタリー』, 第208号 (2022年3月15日).
- 山添博史 (2022b). ロシアのウクライナ侵攻—旧ソ連空間と国際規範への第惨事—. 増田雅之 編. 『ウクライナ戦争の衝撃』. pp. 25-49. インターブックス.